

# スリランカで中国が経済支援する意味

● 放眼日中



初めてスリランカを訪れた。バンコクからスリランカ航空でコロomboへ飛んだが、機内にはタイ人やスリランカ人だけでなく、中国人の姿がちらほら。観光客と思われる若者もいたが、どう見ても観光客には見えない一張羅の上着を着たおじさんたちが十数人、固まって座っている光景が少し異様だった。

2009年の内戦終結後、中国によるスリランカへの経済支援が活発化している。道路、港湾、空港、発電所など幾つもの大型インフラプロジェクトを受注し、盛んに工事が行われている。工事に携わる労働者は地元の間人ではなく、私と同じ飛行機に乗っていた例のおじさんたち、中国人出稼ぎ労働者とおぼしき人々である。

スリランカ人は「日本の支援は地

元の人間にも利益があるが、中国は労働者まで全て運び込んでくる。地元には全くメリットがなく残念だ」と話している。一方、ある中国企業の幹部は「地元労働者の作業効率は相対的に低く、支援を速やかに行うには中国人労働者が不可欠だ」と指摘している。因みに、日本の建設会社も多数進出して工事を行っているが、「なかなか思うように進まず、利益はあまり出ていない」との嘆きの声も聞こえてくる。

実際にコロomboから南部の歴史的な都市ゴールまでバスで移動したが、高速道路は中国の支援でできており、車中は快適だった。スリランカの発展に尽力するラジャパクサ大統領の地元、ハンバンタの港湾建設などの大規模開発を中国が請け負っており、中国輸出入銀行が数億\$単位の

融資を行い、資金を賄っている。また昨年11月には中国の後押しでスリランカ政府が四川省での通信衛星打ち上げに成功、今後スリランカで衛星放送が見られるようになるという。中国の狙いは明確である。第18回共産党大会でも謳われた海洋進出だ。インド洋はインドとの関係、さらには中東をもにらんだ重要拠点であり、スリランカおよびバングラデシュ、友好国パキスタンによるインド包囲網を着々と整えている。パキスタンに近く、地理的に優位なインドも中国への対抗上、スリランカへの援助を増加させ、さらに中東からはショッピングモールなどの商業関連の投資が相次いでおり、内戦終了と同時にホットな陣取り合戦が繰り広げられている。

そんな中、従来スリランカへの最

大の支援国だった日本だけが、その存在感を薄くしているように見える。街では自動車の増加が顕著で渋滞も見られるが、その多くが中古の日本車である。それでも日本企業は「遠くて小さな島」への関心をあまり持っていないようだ。トルコへ行った時も感じたが、「親日国を大切にする」「世界で仲間を増やす」ことは極めて大事なことでと思うのだが、いかがだろうか。

そうは言っても、内戦終結後間がないため、投資環境が整っているとはいえない。中国人もスリランカでのビジネスでは苦戦しており、「まるで中国の80年代、改革・開放直後のようだ」と肩をすくめる。中国のスリランカ投資は現時点では完全に政治目的だが、今後徐々に民間投資が入ってくると思われる。



コラムニスト・アジアウォッチャー  
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。